2026（令和8）年度館長講座・学芸員講座

【館長講座】

■第1回 「発見と収得あるいは収奪（1）――3つの至宝の数奇な物語」
7月11日（土）14：00－15：30

ロゼッタストーン、パルテノンフリーズ（ともに大英博物館蔵）そしてミロのヴィーナス（ルーヴル美術館蔵）――フランス革命から19世紀初頭にかけて、フランスとイギリスによって相次いで発見・収得されたそれぞれの至宝の数奇な物語を、時代背景を交えて紹介する。

■第2回 「発見と収得あるいは収奪（2）――アナトリア半島の3遺跡」
9月26日（土）14：00－15：30

19世紀、オスマン帝国の支配するアナトリア半島（現在のトルコ）の各地で、ヨーロッパ各国（もしくは個人）による大規模な発掘が行われ、重要な発見があった。しかしそのほとんどは、アナトリアの地を離れてヨーロッパ各国の博物館に収められている。本講座ではシリーズの2として、アナトリア半島の3つの遺跡の発掘と発見、そして収得（収奪）の歴史を概説する。

■第3回 「ルドルフ2世の宮廷と美術」
11月21日（土）14：00－15：30

16世紀後半から17世紀初めにかけて、神聖ローマ帝国のルドルフ2世は首都をウィーンからボヘミア（チェコ）のプラハに移し、科学・錬金術・文化芸術を手厚く庇護した。ボヘミアングラスを世界レベルにまで発展させたのも彼の功績のひとつである。彼の宮廷には天文学者のケプラーや画家のティントレット、スプランヘル、アルチンボルトなど時代を代表する多くの人材が集まった。本講座では、アルチンボルトを中心に、ルドルフ2世の宮廷美術について紹介する。

【学芸員講座】

■第1回 「斎藤清と素描」
6月20日（土）14：00－15：30

木版画・コラグラフ・ドライポイント、油彩画、墨画と、生涯にわたり多彩な作品を残した斎藤清。彼の画業を支え続けたのが、膨大な素描（スケッチ）群です。目にしたもの、出会ったものを克明に捉え、そこに描いた日・場所、さらにはモティーフの色味やその時々の感情までも書き込まれることがあるそれらは、今もなお斎藤清研究における第一級の資料であるだけでなく、画家のまなざしや想いを直に伝える作品としても、忘れがたい魅力を放っています。そんな斎藤清の素描の見どころを紹介します。

■第2回 コレクションは語る。やないづ町立斎藤清美術館秘話
8月22日（土）14：00－15：30

展覧会をはじめ、あらゆる美術館事業の核となる、「コレクション（収蔵品）」。それは、単なるものの集合体などではありません。コレクションの形成には実に様々な人たちが関わり、彼らの手を経て美術館にやってきたものたちには、その1つ1つに多彩なバックグラウンドがあります。現在1,000点を超える斎藤清作品と約100件の関連資料を数えるやないづ町立斎藤清美術館のコレクションもまたしかり。斎藤清、その縁者や友人、柳津町などゆかりの場所の住民、画廊・ギャラリー、個人の愛好家、そして美術館の職員たち。コレクションに秘められた数々のエピソードから、やないづ町立斎藤清美術館の歴史が見えてきます。

■第3回 墨画の大作！斎藤清《柳津の全景》へいたる軌跡
10月17日（土）140：－15：30

《柳津の全景》（1977年）は、斎藤清の墨画作品としては最大規模のものであると同時に、その優れた技量がいかんなく発揮された代表作の一つです。柳津町のシンボル・福満虚空蔵菩薩円蔵寺周辺を起点に、只見川に架かる瑞光寺橋から背後に山々を背負う沿岸の小巻集落、その対岸側に視線を移し現在役場や学校がある安久津、斎藤が晩年暮らした一王町へといたるほぼ360度の大パノラマを、高さ約60cm、全長約8．5メートルにも及ぶ長大な画面に収めています。この大作が生まれた背景には、画家と柳津町との間で紡がれた深い縁がありました。誕生へといたる数々のエピソードとともに、《柳津の全景》の魅力を語ります。